巻頭言

英文論文の掲載にあたり思うこと

藤　本　圭　作

私が生まれる３年前の昭和27年に，信州医学雑誌が創刊され，58年目になります。長きにわたって信州大学医学部のスクールジャーナルとして本学部の発展に寄与してきたわけですが，昨年の２月発行の第57巻から邦文論文に加えて，新たに英文論文の掲載が可能となりました。これまで57巻６号（平成21年12月発行）に１編，58巻２号に１編の掲載となりました。現在も数編の投稿があり，査読中ときいています。

そこでわが国におけるスクールジャーナルの現状について，全国80大学医学部の内，調査ができた66大学の医学部について報告します。この66大学医学部の中で，スクールジャーナルに日本語のみ掲載が可となっている大学は18大学のみでした。残り66大学中48大学のスクールジャーナルでは英文論文の掲載が可能になっていますがその形態は様々です。英文と邦文が別の雑誌になっている大学は16大学，英文雑誌のみが９大学，信州医学雑誌のように１つの雑誌に英文と邦文のどちらでも可となっているのは23大学の医学部でした。今回の調査で英文論文の掲載が可となっている医学部がとても多いことに少し驚きましたが，今の国際社会から考えると当然のことのように思いました。また，スクールジャーナルの中には，岡山大学医学部や東北大学医学部のようにインパクトファクターがついている英文雑誌もありました。今回，信州医学雑誌に英文論文を掲載するにあたり多くの議論があったように思います。例えば英文論文を掲載する意味があるのかどうか，果たして英文論文を投稿してくれるのかどうか，英文チェックをどうするのかなどの懸念がありました。しかし信州大学を中心に行われた優れた研究の多くを世界に向けて発信するためには英文論文を掲載することが必要不可欠であるという結論に至ったわけです。

英語で論文を書くことはとても大変で多くの労力を必要とします。たとえ多くの英文論文を書いておられる先生でも同様だと伺いました。それに加えて，海外の英文雑誌では必ずと言って良いほどnative speakerによるチェックが要求されます。ひどい場合は，すでにnative speakerによるチェックを受けているにもかかわらず再度チェックを受けなさいと指示されます。この費用はばかにならず数万円もかかってしまい，若い先生の中には自腹を切っている先生もいます。つまり英文論文を書くとお金がかかるというわけです。この点，信州医学雑誌では論文がacceptされた段階で，無料でダベンポート先生が英文を懇切丁寧にチェックされます。最近は英文雑誌の種類は増えていますが，acceptされることが非常に厳しくなっているのが現状だと思います。また，インパクトファクターの高い一流英文雑誌ということだけで論文の質が評価されているように思われますが，決してそうではないと思いま

す。ノーベル賞にノミネートされるような独創的な研究は最初から評価されることのほうが少ないと思います。現実として，行われた研究成果や貴重な症例が全て論文になっているわけではなく，ましてや英文論文となっているのは非常に少ないと思います。しかし，学術集会では報告されていても論文になっていない研究成果や症例報告の中には，非常に貴重なすばらしい研究成果がいくつもあり，闇に葬られてしまっているケースは多々あると思います。是非とも多くの研究成果や症例を信州から世界に発信したいものです。

私が卒業した頃は，信州医学雑誌に掲載された論文は学位論文として認められ多くの先生が学位をとっておられましたが，平成11年（1999年）発行の47巻２号を最後に学位論文の対象となる原著論文の掲載はなくなりました。これは英文論文でないと学位論文として認められなくなったこと，さらにインパクトファクターが0.3以上の国際的英文雑誌に掲載された原著論文であることが学位対象論文の必要条件となったことが原因でした。学位論文の対象からはずれたことも要因の１つと思われますが，その後信州医学雑誌への原著論文の投稿数が減少すると共に会員からの収入も減ったことを記憶しています。ところが，信州大学医学部学位論文の内規が平成21年６月24日に改正され，大学院医学系研究科課程による場合も，論文提出により学位を取得する場合も，共に以下のように記載されています。“学位論文は原則として，学位論文申請者の英文原著論文であり，印刷公表されたものであること。学位論文申請者が，筆頭著者あるいは筆頭著者相当であること。学位論文を掲載する雑誌としては，① インパクトファクター０.３以上の国際的雑誌，② 信州医学雑誌（ただし英文論文に限る），③ その他，研究科委員会が認めた雑誌のいずれかに相当するもの”と，②の条項が新たに加わり，信州医学雑誌に掲載された英文論文が学位論文の対象となったわけです。一方，医学部保健学科の場合は，2002年に信州大学医学部の併設であった医療短期大学部から現在の保健学科となり，2007年（平成19年）より修士課程が設置され，2009年（平成21年度）から博士後期課程が設置されました。この後期課程学位取得のための学位論文の条件は上記と同様ですが，さらに加えて複数のレフリーによる審査がある当該研究領域で権威ある邦文雑誌に掲載された原著論文で研究科委員会が認めた雑誌を含むとあります。これを機会に医学科のみならず保健学科からも多数の原著論文の投稿を期待したいものです。

信州医学雑誌が創刊されてから58年になりますが，邦文論文に加えて英文原著論文の投稿が可能となり，さらに学位論文の対象となりました。また保健学科に大学院前期課程（修士課程）に加えて大学院後期課程が設置されました。先ほど大学院前期課程の修士論文発表会が終わりましたが，どれもがすばらしい研究内容でした。是非とも信州大学医学部で育まれたすばらしい研究成果や症例を信州医学雑誌を通して全世界に発信していただきたいと思います。

（信州大学保健学科検査技術科学専攻 生体情報検査学講座教授）